

作家の眼

二十世紀の『幕の柄』

— 飛行者の倫理に就いて —

梅垣足穂

十七世紀の後半期に、フランスのサブレ

の鍛冶屋バスニエが、両端に蝶番式の羽根を

つけた二本の棒を担いで手足でバクバク動か

して飛ぶという絵は大抵の人が知っている。

これについてある若い女性が云うのに、「先

生、バスニエが真裸で実験している絵は素敵

です。飛ぶということか、もともと翼というよ

うな形で肉体と密接すべきだという暗示が此

処にあるように感じます。完成された飛行機

がつまりないうというふうな笑……」

映画「ヒコキ野郎」を観た人は、最初に

現われる飛行装置がいずれも人間の筋肉とむ

すびつけられていたことを知るであらう。最

も純粹な意味ではここまであつたヒコキしで

あり、あとは歴史的技術的航空機として、

もはやロマンティックな冒険の範囲を逸脱し

人肉の本質にやつて極めて危険なるものとし

8P3段 読みは